流星のロックマン～光輝く絆～

ペガサス・キングダム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流星のロックマン～光輝く絆～

【Ｎコード】
Ｎ１１４２ＢＡ

【作者名】
ペガサス・キングダム

【あらすじ】
メテオＧの脅威が去ってから数ヶ月後、冬休みも明けて学校も活気に満ちた。
だが、物語は急展開を迎える。黒い幕の先に人々は何を見るのか？

プロローグ（前書き）

どうも！作者です！
初投稿なので文章力乙ですが
末永くよろし『うっせぇ！さっさとはじめろ！！』
・・・・・・へい・・・・・・・・
（ウォーロックめ・・・いつかこの恨み・・・・）

プロローグ

～プロローグ～

「ひぃっ！た・・助けてくれぇ！」

『うっせーんだよ！守り神だかなんだか知らねぇが消えな！』

『まぁまぁ落ち着きなって。』

その電波体はそう言うとおもむろに槍を取り出した。

『喰らえ！』

『うっうあああああああ！！！』

『あ～あまた殺っちゃったの？』

『ボスに怒られるよ？』

『ヘッ！いいんだよ人間の一人や二人』

そう言ってその電波体達はその場から去っていった。

・・・・その場に「ＤＮ」と書かれたカードを残して。

～～～

『起きろぉおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！』

『スバルうううううううううううう！！！！！』

近所迷惑なぐらい叫んでいるのは世界を3度救った英雄ロックマンこと星河スバルである。

「うるさいよ。ウォーロック」

『うるさいもなにもあるか！時間見てみろ！！』

現在の時刻は８：２０分である。
学校の登校時刻は８：３０分である。

「うわあああああああ！やばい！」

「遅刻するぅ～～！！！」

「スバル～委員長さん達が来てるわよ～～」

「げっ！！やばっ！！」

「ごはんいらないから～！！」

「スバル！ご飯食べないと元気でないわよ！（実話です）」

しかしスバルはお構いなしだ。

「ウォーロック、電波『いやだね、お断りだ！』ええ～そんなこといわずに～」

『仕方ねぇな。「ありがと！」ケッ！貸しだぜ！』

「トランスコード！シューティングスター・ロックマン！」

『ちなみに、貸しだぜ！』

「・・・わかった・・・・・」

プロローグ（後書き）

『ポロロン　早くわたしたちを出しなさい。［あれ、さっきも同じことといってた気がするわね］』

「そうだよ！はやくスバル君に告〇したいのに～！［あれ？さっき同じことといったきがする］」

ギクッばれてんのか？
作者がふがいないばかりに
短編にしちゃって作り直したこと・・・

『へぇ～そんなトリックがあったのね』

え・・・？あ、いやこれには深い理由（ワケ）がありまして・・・・

「うるさい！次話いく！」

ミ・・・ミソラちゃんコワイよぉ～
というわけで前作読んだ人は大変申し訳ありませんでした。
ほんとに次話どうぞ

第1話　3人の転校生（前書き）

どうも！作『うっせぇ！出番よこせ！』ちょwwウォーロックww
前書きぐらいやらせ『ビーストスイング』うっわあぶね！
もういいや出番減らすから。
『すいませんでした！！！！！！！』
それでよろしい！
では本編スタート！

第1話　3人の転校生

「トランスコード！シューティングスター・ロックマン！」

『ちなみに、貸しだぜ！』

「・・・わかった・・・・・・」

（ん？この周波数は・・・・・！？いや、あいつらは消去（デリート）したはず・・・・俺の勘違いだといいんだが。）

「あ！あれは！」

『どうしたスバル？　敵か？』

「あ、いや家の入り口見てみて？」

そこには大量のマスコミがいた。

『お前も大変だな』

そうつぶやいて2人は学校へと向かった

～～～

「？」

「あなたのせいで私たちまでチコクしそうになったじゃない」

この人は白金ルナ。クラスの委員長を務めている。
しかしみんな本名でよばない。委員長と呼んでいる。

「そうですよ！スバル君！ぼくらまで委員長の説教に付き合わされるんですよ！」

こいつは最小院キザマロ。頭がよくて、その頭脳は高校生に負けず劣らずだけど、
背が低いのを気にしている。

「そうだぞ！スバル！だから牛丼奢れ！」

この人は牛島ゴン太腕っぷしが強くて
たよりになる。でも頭が悪い。
みんな個性が歩けどみんな大切な親友（ブラザー）だ。

「そんなことより今日は転校生が3人も来るらしいですよ！」

「そうね・・・右も左もわからない転校生に色々教えるのも
チームルナルナ団の使命よ！」

正直そこまでしなくていいとおもう。
するとそこで先生が入ってきた。

「みんな～席につけ～」

第1話　3人の転校生（後書き）

目指せ！1日5話投稿！！
てなわけで仮眠を・・・Ｚｚｚ

第2話　屋上での出来事～1～（前書き）

今書きだめしいていますが、長期にわたって連載できない可能性があるのであしからず。
では本編をどうぞ！

第2話　屋上での出来事～1～

「みんな～席につけ～」

「何故かすでに噂になっているようだが転校生を紹介するぞ～！」

「みんなよく知ってるから仲良くするように」

このときみんな頭の上に？マークだった

・・・が次の瞬間クラスが活気に溢れた

「「「「「「「「「「おおおぉ～～～！！！！！」」」

その瞬間クラスが凍てついた。

「「「

そして爆弾は落とされた。

「私、スバル君の隣がいいです！」

「・・・だ、そうだが星河いいか？」

「ふぇ？なにがですか？」

突然の出来事にスバルは腑抜けた声をだしてしまった。

「だから星河、響がとなりでいいか？」

（ううっクラスの視線が痛い・・・・）

しかしスバルは勇気を出した

「あ、はい。いいですよ」

そしてミソラちゃんが駆け寄ってきた

「ヨロシクね！スバル君！」

満面の笑顔で言ってきた。

「こちらこそよろしく！ミソラちゃん！」

スバルも笑顔で返した

するとミソラちゃんの顔がほんのり赤くなった気がしたけど気のせいだ

大体いまのせきじゅんはこうなっている

ゴ女　女キ　男女　　・・・ゴ＝ゴン太　　・・・ツ＝ツカサ
男女　女男　男女　　・・・委＝委員長　　・・・ジ＝ジャック
男女　女男　ツ委　　・・・キ＝キザマロ　　・・・ス＝スバル　・
・・ミ＝ミソラ
男女　女ジ　スミ

「おい！星河！お前ミソラちゃんとどういう関係だ！」

クラスの男子一人がいってきた
スバルは頭に？マークがついていた。

「どういう関係ってどういうこと？」

「いや、だからさ、ミソラちゃんが転向してきて初日なのになんで
おまえのこと
『スバル君』なんていうんだよ」

「だってブラザーだもん♪
ね！スバル君！」

「え、うんそうだけど」

「「「

「ふぅ〜あぶなかったぁ」
スバルは胸をなでおろしていた
そのときミソラはスバルにこういった
「あ、そうそうスバル君」
ミソラがたずねてきた
「何？ミソラちゃん」
「後で屋上に来て、」
「？なんで？」
「いいからいいから♪」
「うん。わかった」
この話を聞いていた委員長はハッとなった
そして2人についていくことにした
〜〜〜

「おい！星河！なんでミソラちゃんとブラザーなんだよ！
２人に接点ないだろ！」

「そういわれるとそうだけどさ」

「別にいいじゃん！！！そんなのどうだって！！！！」

なんと口を開いたのはミソラだった
そして男子達はだまった

「もういこ！スバル君！」

「え？あ、ちょっと！」

半場スバルは引きずられていく形で教室をでていった

第2話　屋上での出来事～1～（後書き）

『勝負だ！作者！』
なんで？
『俺が勝ったら出番ふやせ！！！』
ああ、そゆことか、
だ・が・断・る
『てめぇ！逃げるのか？」
仕方ないなぁ
トランスコード！ペンソールサクシャ・ノックマン！！
『おい作者！ノックマンってなんだ！？』
作者と作者のウィザードのイーノックが電波変換したのさ！
『ぬぬぬ・・・』
『（そうだ！これなら・・・）』
『そんな名前で大丈夫か？』
大丈夫だ、問題ない。
『よっしゃあああ！！！！今フラグたてたな！！！！』
・・・・・もう長いんで次話に持ち越しますね
それでは！『あ、おい！にげるのか？』

第3話　屋上での出来事～2～

「え？あ、ちょっと！」

スバル達が教室を出てからすぐに男子達がおいかけようとしたが委員長が引きとめた

「お止めなさい！」

「どういうつもりだよ委員長！！」

男子が言った

「どういうつもり・・・じゃないでしょ！　あなた達のせいでミソラちゃんはおこったんでしょう？」

「俺達はただ2人の関係について聞いてただけ・・・・ってあ！」

「そう。あなた達は人の言いたくない部分まで深入りしすぎたのよ。」

「みんなは知っているか知らないけどミソラちゃんには両親がいないのよ」

男子達は驚きの表情を隠せなかった

「そしてスバル君にも父親がいなかった時、二人は出会ったのよ」

「ここまでいったらわかるかしら？」

「これ以上二人に深入りしないこと、わかったわね？」
そういうと委員長は教室を出て行った
～～～

「僕が迎えに行くから「いやいいよ迎えに来なくて」

スバルは？だった

「え？なんで？」

ミソラがにっこり笑っていった

「内緒だよ♪」

「そう？ならいいんだけど」

「それじゃ帰ろっか」

「うん！」

「「トランスコード！！！」」

「シューティングスター・ロックマン！」

「ハープ・ノート！」

青色の光とピンク色の光が空に飛んでいった

「・・・・やっぱり・・・・くやしい・・・・」

委員長はそうつぶやいて屋上を後にした

～～～

そのころウェーブロードでは

「「ハックション！！」」

二人が同時にくしゃみをしていた。

「あれ？だれかぼくらの噂でもしたのかな？」

「あはは！へんなの！」

「うん、そうだね！」

二人は笑いあっていた

第3話　屋上での出来事～2～（後書き）

『もどってきたか、ノックマン』
ん、ああもち
『続きだ！』
無理　お前じゃ相手にならん
『なんだとてめぇ！』
うるさい、喰らえノックバスター！！
『グハッ　つっ強い』
3分間まってやる。
「お～いウォーロック～！」
『お！スバルか！　事情は後で話す！電波変換だ！』
「え？うん、わかった」
「トランスコード！シューティングスター・ロックマン！」
おや？スバル君もきたね
では改めて・・・・
3分間んまってやる
（（どこのム〇カ大佐ですか（だ））
ということで次話で～！

第４話　黒き脚本家と流星の決断（前書き）

次の話でバトルにもってけそうです＾＾
さぁて！がんばります！

第４話　黒き脚本家と流星の決断

「あはは！へんなの！」

「うん、そうだね！」

「ねぇミソラちゃん？」

「なに？スバル君？」

「もうすぐ僕の家だけどさ、ミソラちゃんの家ってベイサイドシティじゃなかった？」

「あれ？聞いてなかった？今日の転校生みんなコダマタウンに引っ越してるんだよ？」

「あれ？そうだったの？初めて聞いたよ」

スバルは心底驚いた表情だった

「じゃあみんなどこにすんでるの？」

「それはね、クインティアさん、ツカサ君、ジャック君がスバル君の家のとなりで、「あっちょっちょっと　まって？」

「なに？スバル君」

「なんでクインティア先生が引っ越してるの？」

「だって冬休み明けからまたくるんだよ？」
「え？どこに？」
「コダマ小学校に」
「へぇ～そうなんだ、やったねミソラちゃん！」
「うん、そうだね」
「で、話をもどす・・・」
～～ＰＬＬＬ！！～～
「あ、ＷＡＸＡからだ、」
「どうしたんですか？ヨイリー博士？」
「あ！スバルちゃんにミソラちゃん！！理由は後で説明するから今からＷＡＸＡに来て頂戴！！」
なにやらヨイリーは、緊迫した面持ちで言った
その顔を見たスバル達の顔が引き締まった
「はい！今すぐ向かいます！」
ーープツン！
回線が切れた
そしてスバルは言った

「行こう！　ミソラちゃん！」

「うん！」

そして二人はコスモウェーブに向かった

～～～

・・・・そうミソラが捕らえられていた
ファントム・ブラックによって

「ンフフフッ！さぁ復讐劇のはじまりだ！」

「ミソラちゃんを放せ！ミソラちゃんは関係ないだろ！？」

「ンフフフ！　残念だが彼女はこの舞台の悲劇のヒロインなのだよ・・・ンフフフ！！」

「ファントム・・・・お前！！」

「動くな！！！！」

「！！！」

スバルは突然のことに動きをとめた

「動けばこいつの命はないぞ！」

「くっ・・・・」

「さぁエースPGMとジョーカーPGMを渡せぇ！！！！」

「・・・・・・」

「さぁどうした？　さもなくばこいつの命はないぞ！？」

「スバル君！私はいいからにげて！！」

―そして、流星は決断をくだした―

第４話　黒き脚本家と流星の決断（後書き）

時間だ、答えを聞こう！
「ファイナライズ！！！」
「ブラックエース！！」
バ・・・バカな・・・なぜ・・・
「なぜって、それはね」
「あとがきだからなんでもありなんだよ。」
なんでもあり・・・・そうだ！
スバル君～♪
ここにはここでおきた記憶を消すボタンがあるんだよぉ～♪
「ふぇ？」
いくよ！
それっ
ポチッ
ではまた次話で～　「ううっ僕はいったい」

第5話　トリプルトライブ（前書き）

正直にいいます。
めっちゃ強引です！
それではどうぞ！

第5話　トリプルトライブ

「スバル君！私はいいからにげて！！」

―そして、流星は決断をくだした―

「・・・・・わかった・・・・・」

スバルはエースＰＧＭとジョーカーＰＧＭを投げた

～～～

〜〜〜

った

「はあああああ！！！！」

そして光がだんだん強くなりやがて目もあけられなくなった

その光が晴れるとそこには・・・・・

『「トリプルトライブ！　トライブキング！！」』

「！？なにが起こっているのだ　ロックマンお前はまた力を手に入れるというのか！？」

「違うよ・・・・これはミソラちゃんを助けたいという想いの・・・・絆の力だ！！」

――ピカーァァン・・・・

光が晴れるとそこにはロックマンとハープノートの姿はなくただファントムだけが立っていた

「くそぉっロックマンめぇ！とんだ見掛け倒しか・・・次こそ必ず・・・ンフフフッ！！」

そういうとファントムは周波数変換でその場から消えた

「・・・うぅん？」

「大丈夫だった？ミソラちゃん」

「うん、大丈夫、ありがと助けてくれて」

「でもスバル君、あの変身は？」

「ああ、トリプルトライブのこと？　あれはねまだ不完全なんだ、まだ見掛け倒しってところだよ」

「ところでさミソラちゃん」

「なに？スバル君」

「／／／お姫様抱っこやめていい？／／／」

「／／／！？／／／」

「／／／ふぇ？あ、うんいいよ／／／」

そんな会話を交わしながらＷＡＸＡに向かった

第5話　トリプルトライブ（後書き）

・・・・なんだろうこのぐだぐだ感・・・・・・・

第6話　覚悟と想い（前書き）

あああ～ぐだぐだぁ～
とっとときりあげて日常いこっと！
本編どうぞ！

第6話　覚悟と想い

ＷＡＸＡに着くと入り口でヨイリー博士が待っていた

「スバルちゃん！ミソラちゃん！詳しい事情はあと！メインコンピュータールームに来て！」

「「はい！」」

～～～

謎の場所

「ふぁ～あぁ・・・ココどこだろ」

そこには暁シドウがいた

『わかりません・・・計測フノウです』

「マジで？」

『ハイ・・・私でもここがどこだかワカリマセン』

「そっかぁ」

「ふぁ～あぁっ　眠み～なぁ」

――シドウ！いかないで！――

「な・・！？ティアの声だ！！」

「いくぞアシッド！電波変換だ！」

『わかりました、シドウ』

「トランスコード００１！アシッド・エース！！」

～～～

皆は一瞬駄目だったのかとおもった・・・・だが

「ええ・・・・データが融合していくわ・・・・・」

「ヨイリー博士！メインコンピュータールームにトランスコード・アシッド・エースの電波変換の反応があり　ました！」

全員の期待は確信へかわった
そして懐かしの声が聞こえた

「ウィングブレード！！！」

「・・・・シドウ？・・・・・」

「ティア、大丈夫か？怪我してないか？」

「・・・・え？・・・・・」

「あれ？みんななんで泣いてんだ？」

それから事情をシドウに話し・・・

「そういうことか！」

「みんな心配させてすまなかった」

そして何故かスバルの家の隣に住むことになった
そしてその帰り道
ゴン太とも分かれてスバルの家の前に2人は立っていた

「ミソラちゃん家に帰らなくて・・・い、いの？」

だんだんスバルは顔が青ざめていった

「うん！だから帰るね」

「お邪魔しま～す！」

「・・・・ただいま・・・・・」

「あら、お帰り二人とも、」

「スバル君のお母さん遅くなった理由（ワケ）は・・・」

「いいわよもう連絡きてるから」

「ホントですか？　ならよかった」

「ミソラちゃん？　ここは、もうあなたの家なんだから帰ってくるときはただいまっていうのよ？」

「え？・・・」

「それにあなたはもう家族なんだから私のことも『お母さん』でいいのよ？わかった？」

その瞬間ミソラが泣き崩れてしまった

「ううっ・・・ぐずっ」

すると茜がミソラを抱きしめた

「大丈夫よ、ミソラ」

「ううっ・・・ありがと・・・お・・母さん」

その中で男子組みは・・・・

（『僕ら（俺ら）のこと忘れてない！？』）

第6話　覚悟と想い（後書き）

ついに定番のアレがきますよ～♪
さぁてがんばらばきゃな！

第7話　ミソラの『スバル芸能界デビュー大作戦』（前書き）

さぁ今回もぐだぐだ参りましょ～
それでは本編どうぞ！

第7話　ミソラの『スバル芸能界デビュー大作戦』

「へぇ～スバル君の部屋って宇宙の本ばっかだねぇ～」

『まぁそれしか取り柄がねぇんだけどな、スバルは』

『ポロロン　ちょっとこっちこようね～ロックちゃん♪』

『あぁ！なんだとハー『なにかいったかしら』いいえ！なんでもありません！』

『じゃあ行きましょうか　クスクス』

『よろこんでお供させていただきます！』

会話を終えると2人？　の宇宙人はどこか行ってしまった

「はぁ～まさかミソラちゃんが家に居候するとは・・・」

「あれ？私が来るのいやだった？（上目使い＋涙目）」

「ううっ嫌じゃないよ（それはずるいよ・・・ミソラちゃん・・・）」

「ところでさぁ、スバル君、スバル君ってギター弾ける？」

「え？う～んやってみなきゃわかんないや」

「じゃあはい、やってみてよ」

そういうと自分のギターをスバルに手渡した

「わかった、でもどうやるの？」

というとミソラがスバルのうしろにまわってピッタリ体をくっつけてきた

「／／／ミ・・・ミソラちゃん！？／／／」

「ギターを弾くには・・・まずこうやって？」

「え？うんわかった」

ポロロォン―・・・・

「じゃあ今度は一人でやってみて？」

ポロロォン―・・・・

「すごいね！　スバル君！たった一回でそこまでできるのはすごいよ！」

「これなら芸能界デビューも夢じゃないよ！」

「いや・・・僕は別にデビューしなくてもいいんだけど・・・・」

このとき決まってしまった・・・・

ミソラの『スバル芸能界デビュー大作戦』

スバルがこの作戦について気付くのはもう少しあとのことである。

第7話　ミソラの『スバル芸能界デビュー大作戦』（後書き）

ついにやってきました
王道中の王道！
スバミソ路線ですがヨロシクおねがいします！

第8話　スバル君とお風呂♪～1～（前書き）

1日がおわらないぃ～

第8話　スバル君とお風呂♪～1～

「スバル～　ミソラ～　ご飯よ～」

「「は～い！！」」

あれからスバルはギターを練習し（させられ）
そこそこ上達したのである

「「いただきま～す！！」」

今は大吾は勤務中でスバルとミソラの3人でご飯を食べている
だが鬼とはいつ何時やってくるかわからないものだ

「ねぇねぇ2人とも、2人とも付き合ってるの？」

「「／／／！？／／／／」」

「ゲホッゲホッ・・・か・・母さんまだ付き合ってないよ」

「そうだよ、お母さん、まだ付き合ってないよ」

「あれ？でも、まだ、なんでしょ？」

「「／／／・・・・・／／／／」」

「／／／ごっ、ごちそうさま！／／／／」

「／／／私もごちそうさま！／／／／」

「お粗末さま」

「あ、ミソラまって」

「へ？あ、はい」

「部屋、片付けたけど？どうする」

「スバルの部屋に・・・「スバル君の部屋がいいです！」そう・・・・
なら荷物もってっちゃいなさい」

「／／／は・・・はぃ／／／／」

「じゃあ布団は1つでいいわね？」

「／／／は・・・・ぃ／／／／」

そういうとミソラはいそいで階段を駆け上がった

「ウフフッ　可愛いんだから」

そういうと食器を片付け始めた

〜〜〜

「今日一緒に寝よ♪」

「無理」

即答だった

ミソラはＯＫ出すと思っていたらしいが実際は違った

「え？なんで」

「僕男の子だからね？」

「スバル君そういうことする子じゃないじゃん」

「てかスバル君私のこと嫌いなの？（上目遣い＋涙目）」

「ううっ（やばいっ可愛すぎるっ）

「わ・・・わかったよ」

「２人ともお風呂沸いたわよ～」

「それともいっしょに入る？」

「「／／／／！？／／／／」」

「／／／／い・・いっしょに入ります！／／／／」

「／／／／え？ちょミソラちゃん／／／／」

「・・・駄目？」

「いいよ・・・・（ここで粘るとまたアレやられるからね・・・・観念しよう）」

「んじゃいこっか♪」

第9話　スバル君とお風呂♪～2～

「／／／スバル君・・・こっち見ないでよ／／／」

「うん、わかった」

「もういい？」

「もういいよ♪」

「じゃあ僕着替えるからこっちみないでね」

「ウン」

「もういい？スバル君」

「いいよ」

「じゃあ入ろっか」

「・・・・うん」

「じゃあ僕先にからだあらうからコッチ見ないでね」

「うんわかった」

～～～

「わかった！」

「こっちみないでよ！」

「／／／っみ・・・みないよ！／／／」

～～～

「だって気持ちいいんだもん♪」

「はぁ～」

「もうでよっか？」

切り出したのはスバルだ

「そうだね♪」

そういってふたりはお風呂からでていった

～～～

第９話　スバル君とお風呂♪～２～　（後書き）

１０話でおそらくスペシャルストーリーだします！・・・・たぶん

第１０話　スペシャルストーリー～ｖｅｒ１～（前書き）

初のバトルシーンです＾＾けっこうがんばりました。
まぁ温かい目で見守ってください。

第１０話　スペシャルストーリー～ｖｅｒ１～

それは、今から1週間前の話・・・（小説内）
それはミソラが本格的にスバルを意識し始めたころの話・・・

～～～～～スペシャルエピソード～～～～～

その日はミソラがスバルに
スキーに誘った日で
ミソラもずいぶん張り切っていた

『そんなもんで大丈夫だと思うわ、ミソラ』

「うん、よし！　ありがと、ハープ」

『それじゃぁ行きましょうか？』

「うん！」

「トランスコード！ハープ・ノート！！」

眩いピンク色の光が部屋全体を覆って、
次の瞬間は部屋に誰もいなかった

『ミソラ、家の戸締りした？』

「うん！バッチリ！」

『それじゃ急ぎましょうか！』

「うん！」

～～～

「シューティングスター・ロックマン！」

「ハープ・ノート！」

「それじゃ、レッツゴー！」

こうしてミソラとスバルの壮絶なスキー旅行が始まった

～～～

「あ、まだだった」

「じゃあちょっと済ませてくるからそこでまっててて！」

「うんわかった～！」

ミソラはエレベーター付近で待っていた
なぜならあんまり目立つと正体がばれるからだ

「ちょっと嬢ちゃん着いてきてもらうぜ」

「え？あなただ・・・ん！！んんん！！！ん・・・・」

ミソラはピンク色の服をきたゴリラのような中年のおじさんに捕まってしまった
そう・・・・こいつは五里だ

「寝たか・・・」

ミソラは薬物をかがされ気絶してしまった

そしてエレベーターに引きずり込まれ

「電波変換！」

なんとイエティ・ブリザードに電波変換したのだ

「グハーーーー！！まってるぜ！あのクソガキ！」

そういうとイエティは周波数変換でどこかに消えた

～～～

そしてリゾートの回線をジャックしてこう伝えた

「グハーーーー！！！　オレ様はイエティ・ブリザードだ！　今手元にこの小娘をあずかっている！早く　防寒着着てないから早くしないと凍え死んじゃうだろうなぁ！　さぁはやく来い！ロックマン！

そしてリゾートでは「あの娘(こ)響ミソラじゃない？などの噂が流れあたりはパニックに落ちいった

～～～

「バトルカード　プレデーション！　ブレイクサーベル！」
そう行ってウォーロックアタックを使い一瞬でイエティの後ろに回りこんだ
「はあああああ！！！」
ガキィィィン！！
・・・と鈍い音がしたが・・・
「そ・・・そんな！？」
なんとイエティの背中にはキズ一つついていなかった
「グハーー！！きかねぇなガキィ！こんどは・・・こっちだ！」
イエティはいきなり後ろを向いて踏みつけてきた
だがロックマンも負けじと紙一重で攻撃をよけた
「・・・・掛かったな！！」
「・・・なんだって！？」
「ナダレダイコォ！！！」
「う・・・うわあああああああああ！！！！！」
ロックマンはイエティの放ったナダレダイコによってゆきに埋もれた・・・ハズだった

「トライブオン！！」

「なにぃ！？」

「オーパーツは海に沈んだハズ・・・・！？」

「サンダーベルセルク！！」

「一気に決めるよ！」

「ふざけるなぁ！ナダレダイコォォォォ！！！！！！」

「絆が僕を強くするんだ！くらえ！　ＫＦＢ（キズヲォビヌクバン）！！
サンダーボルト・・・・ブレイドおおお！！！！！！」

お互いの必殺技が炸裂した・・・・
だが　そこにたっていたのは・・・

「グハァ・・・グハァ・・・手間かけさせやがって！」

「く・・・そ！」

たっていたのはイエティだった
しかしそのときスバルの耳にかすかな声が聞こえた・・・・

「ス・・・バル・・・・君・・・逃げ・・・てっ！」

ミソラの声だった

「（ミソラちゃん・・・・ミソラちゃんが耐えているのに僕はなに

をしているんだ！たたなきゃ！そしてミ　ソラちゃんを助けるんだ！うおおおおおおおおお！！！！）」

その瞬間ロックマン・・・・いや、スバルから3色の閃光がほとばしった

「何！？まだあいつは立つのか！ありえん！オレのすべてを否定するのかあああああ！！！」

「はあああああああああああああああああ！！！！」

そして光が拡散した。

「トリプルトライブ！！！！トライブキング！！！！！」

そして彼は現れた。

「一気に決めるよ！はあああああああ！！！！！」

「ふざけるなあああああああああああ！！！！！！！　ナダレェ！！！！ダイコオオオオ！！！！！！！」

「はあああああああああああ！！！！！！！カイザー・デルタ・・・・ブレイカアアアアアアア！！！！！」

「ああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！」

二つの技がぶつかり合いそして光が晴れると・・・・

「遅くなってごめんね、ミソラちゃん・・・・」

「おそいよ！スバル君」

これがミソラがはじめてスバルを意識したときの出来事（ストーリー）である

第１０話　スペシャルストーリー～ｖｅｒ１～（後書き）

バトルシーンの感想ほしいです！
感想、アドバイス、苦情（クレーム）まってま～す！

第１１話　星とギターと不穏な影（前書き）

敵さんがすこしでますよ～やっとだせるぅ～
では本編どうぞ！

第１１話　星とギターと不穏な影

二人がお風呂から上がるとほぼ同じタイミングで大吾が帰ってきた

「あ、お帰り、父さん」

「あ、お邪魔してます」

「お帰りなさい、大吾さん」

と口々にスバル、ミソラ、茜の順で行った

「お、早速一緒に風呂入ってるのか？」

「／／／う、・・うるさいなぁ！ちょっと展望台行ってくる／／／」

「あ、まってよ」

そう言うと二人は展望台へ向かった

「そういえば明日が会見の日でしたっけ？」

「ん、ああ、そうだが・・・」

「きっとスバルが驚くでしょうね、ウフフッ！」

どこかの脚本家のような笑いを浮かべると大吾の分のご飯を出した

～～～

「スバル君～♪」

「ミソラちゃん来てたの？」

「うんヒマだからね」

「ねぇスバル君」

「何？ミソラちゃん」

「ギターの練習しよっ」

「い！？今星見に来たんだよ！？」

「じゃあ星見ながら」

「集中できないよ！」

「え？嫌なの（上目遣い＋涙目）」

「い・・・嫌じゃないけど（演技ってわかってるんだけどなぁ）」

「じゃあやろっか」

「・・・・了解・・・・」

その後スバルは星を見ることができなかったという

『なぁ、ハープ』

『なによロックちゃん？クスクス』

『いや・・・・俺らって出番少ねぇよな』

『裏話しちゃだめよそんなこといったらロックマンのライバルのブ○イなんて文字そのものが一回も出てな　いのよ』

『・・・・そういやそうだったな』

そんな他愛もなく平和な生活に不穏な影が忍び寄っていた

～～～

「承知しました、ケラス様」

「・・・・蒼き流星・・・・実力はいかなるものか・・・・」

そういってケラスは後ろの謎の機会に向かった

第１２話　グリーンシノビ（前書き）

もうそろそろトライブＰＧＭ完成させさせようと思います＾＾／では本編どうぞ！

第１２話　グリーンシノビ

現在９：３０分、明日は出かけるのでもう寝ることにしていた・・・
が

「さ、早く寝よ♪」

「やっぱり同じ布団なの？」

「約束忘れたの？」

「いや・・・・」

「じゃあ寝よっか」

そして２人は布団に入った・・・がスバルは極力ベッドの端にいった
たがそれは意味を成さなかった

「／／／なんでミソラちゃん抱きつくの！？／／／」

ースー・・スー

「はぁもういいや僕も寝よ」

だがスバルは決めていた。
明日遊園地で告白する・・・と
だがミソラも同じことを考えていたのは別の話

～～～

『ここが・・・地球か・・・』

地球のニホン上空のコスモウェーブ・・・

『ヤロウども！』

『いくぞぉぉ！！』

そういって聖騎士隊（クラウド）は姿を消した

～～～

『クラウド様！恐らくあの赤い服を着た少年がロックマンだと思われます！』

『へぇ～あいつかぁ・・・少し様子を見てみよう・・・』

そういうとその場から周波数変換で消えた・・

～～～

近くからは「ロックマンだ！」などの安堵の声が広がった

「なんだ！？あのウィルスは！」

そこには地球では見たことがない・・・まして宇宙ですらみたことのないウィルスだった

「ロック！トライブオンならいけるよね？」

『ああ、1分ぐらいならいけるぜ！』

「じゃあ・・・行くよ！！」

「トライブオン！！　グリーンシノビ！！」

そういうと体を突風が覆い、風が晴れるとそこには、ロックマン・グリーンシノビが居た

「行くよ！ＫＦＢ（キズヲオビヌクバン）！！」

「フウマシップウジン！！！」

大量の手裏剣を投げ、周りのウィルスを一掃した

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「ロック・・・なんか・・・体が・・・熱い・・・」

『ああ、俺もだ・・・！？この感じは・・・恐らく近くにオーパーツがあるぞ！！スバル！！』

「え！？ホント？」

『嘘ついてもしかたねぇだろ！』

『行くぞスバル！！』

「まって、ミソラちゃんに一声かけてくる」

そしてスバルはミソラの元に降りた

「ミソラちゃん、近くにオーパーツがあるみたいなんだけど」

「それで取りに行こうとおもうんだ。」

「だからミソラちゃんも来る？」

「うん！いくいく！　まだオープンまで時間あるしね！」

「じゃあいこっか、トランスコード！ハープノート！！」

「トライブオン！　グリーンシノビ！」

そういうと二人はその場から周波数変換で去っていった

『やはり・・・あの程度のウィルスではだめだったか・・・』

そういうとクラウドもどこかへ消えた

第13話　本当のきもち

『やはり・・・あの程度のウィルスではだめだったか・・・』

〜〜〜

『俺？俺はねＤＮの幹部・・・、光、を司る者だ』

『てかそこの娘（こ）可愛いね、お持ち帰りしよっと♪』

「させるか！」

『・・・無理だね・・・』

そういうと一瞬でハープノートの後ろに回りハープノートを捕らえた

「！？・・・早い・・・・！！」

『早い？違うねお前の覚悟が足りないんだよ』

「覚悟だったら持っている！！」

『いいやないねそんな偽りの覚悟なんか覚悟のうちに入らねぇよ！』

急に真剣な顔つきでいった

「覚悟があったからミソラちゃんを助けようとしたんだ」

『じゃあなんで俺のスピードについてこれなかった』

「！？」

『お前は真実（ホント）の覚悟が足りなかった・・・今のお前には偽り（ウソ）の覚悟のお前じゃ俺には勝　てない』

『俺たちは強い信念の下に集まったんだ』

『だが今のお前はなんだ？』

『世界を救った時を思い出してみろ！！』

「（世界を・・・救ったとき・・・）」

「（あの時はただ・・・がむしゃらに皆を助けたかった・・・）」

「（そうだ！今度もがむしゃらに助けるんだ！！！）」

「（だからたつんだ！！そしてミソラちゃんを・・・・！！！！！）」

「助けるんだ！！！！！」

そのとき数あるゴミの中から緑色の光がロックマンに飛んできた

――トライブＰＧＭアップデート・・・ｖｅｒ１カラｖｅｒ２二アップデートシマス・・・・５０％・・　・・７５％・・・・・９０％・・・・１００％・・・・アップデート完了・・・――

「ロック！何分いける？」

他人から見ればなんのことかわからないがウォーロックにはわかった

「１分強だ！」

「わかった！！」

「はあああああああああああ！！！

第１４話　告白（前書き）

はぁ～やっとカップリングまでいけましたぁ～
では本編どうぞ！

第１４話　告白

「カイザー・デルタ・ブレイカアアア

～～～

「僕、白状すると絶叫系嫌いなんだ」
「知ってるよ？だって親友（ブラザー）じゃん！」
「そ・・・そっか・・・」
「大丈夫！いざって時は私がいるから！」
「わ・・・わかった・・・・」
そしてスバルは渋々了承したのだった
「ほら！スバル君！次私達の番だよ？」
『おい、スバル顔が青いぞ？大丈夫か？」
「大丈夫だ、問題ない」
『（あ～あ、あいつ完全にフラグだな、こりゃ）』
そしてついにコースターに座り、安全バーが降りた
ーーガラガラガラガラーー
ーーガラガラ・・・・・
「（く・・・くる！！！）」
「スバル君、目、あけてみなよ」

そうするとコースターは、坂を一気に下った

「あれ？全然怖くない、むしろ楽しいや！」

「でしょ？目を閉じてるから怖かったんだよ」

「うん、そうだね！」

そしてスバル達は遊園地をたのしんで・・・

気がつけばもう5時だった

「あ～楽しかった！」

「ホントだね！」

2人の考えている事は一緒だった

「最後に観覧車いこ？スバル君」

「丁度僕も行きたかったんだ」

「そうなの？じゃあいこっか！」

二人が観覧車に着くと最後のペアだった

2人とも電波変換できるため、すぐに帰ることができるから長く残っているのだ

人が居ないためスムーズに入ることができた

しかし中に入るとスバルとミソラは顔が真っ赤だった

「／／／ねぇ・・・ミソラちゃん・・・・／／／」

「／／／なに？スバル君・・・・／／／」

「／／／あのさ、私も言いたいことあるんだけどさ・・・／／／」

「「／／／僕と（私と）付き合ってください！！／／／」」

「「・・・・ふぇ？」」

「じゃあ改めて僕から言うね・・・」

「ぼっ僕と付き合ってください！」

「私でよかったらお願いします！」

そして観覧車を降りた後２人は黙って家まで帰った

第１５話　束の間の休息

『申し訳ありません！ケラス様・・・・！』

『まさかお前がそこまでやられるとは・・・』

『申し訳ありません！』

『まぁよい、少し休め・・・』

『有り難き幸せ・・・』

『次は・・・・ドーラ・・・お前だ』

『・・・・承知・・・』

会話を終えるとドーらと呼ばれたものはその場から消えた

～～～

「仕方ないよ、昨日夜遅くまでギターの練習してたんだもん♪」

そう、あの日から（第7話参照）スバルは毎日ギターの練習をしているのである。

『そ・・・そうなのか？』

「うん・・・・ごめんねロック君」

『ケッ！まぁいいとりあえず起こす方法を・・・「いい事思いついた！」お？なんかあるのか？』

「うん！だからこれから私がスバル君を起こすね♪」

『おおっそれは助かるぜ！ありがてぇ！』

そういうとウォーロックはウィザードオフした

「さぁて！」

というとスバルの鼻をつまんでキスをした

「・・・ん！？んんんん！？んん！！！」

「ゲホッゲホッ・・・ミ、ミソラちゃん朝からなにするの！？」

「なにするの！？・・・じゃなくて今日はＷＡＸＡにいくんでしょ！」

「あ・・・そうだったごめんね？ミソラちゃん」

「それでよろしい！」

～～～

「!?なんでその情報がそんなところまで!?」

「あ、冗談で聞いたんだけどホントに付き合ってるとはなサクサク」

『・・・・シドウ、話しながら食べるのはやめましょう』

『あ!お前はアシッド!!勝負だ!!表に出やがれ!』

『うっさいわよKY星人!バトルカード!ヘビードーン!!』

ドォォン!!

『テメッ!なにすんだよハー『バトルカード!ジャイアントアックス!』

『さぁ・・・おとなしくウィザードオフしなさい・・・クスクス』

『ひゃっ!ひゃい!!!』

緊張しすぎてウォーロックは舌を噛んでいた
そしていそいそとウィザードオフした
それにならいアシッド、ハープもウィザードオフした

「んで話をもどすとお前ら付き合ってんのか?」

「え?別に付き合ってな「付き合ってます!」ちょ、まってミソラちゃん!この人にばらすととんでもない　ことに・・・・「へぇ〜お前らそういう関係だったのかぁ」

3人はつかの間の休息をとっていた

第１６話　ＷＡＸＡの作戦とオーパーツの在処（前書き）

現在ＰＳＰの投稿です
時間がぁ～

第１６話　ＷＡＸＡの作戦とオーパーツの在処

「スバルちゃん！解析結果がでたわ！」

「ホントですか？」

「ええ、でもスバルちゃんにはある物を取ってきて欲しいのよ」

「それも明後日までにね」

「え？でも明日は学校があるんですけど」

「ああ、その事なら心配しなくていいわ、ＷＡＸＡ権限で休みにしておくから」

「ちょ、ヨイリー博士、それ権力乱用・・・」

・・・・そう、これはまさしく権力乱用である

「そんな事より取ってきて欲しい物って何ですか？」

「それはね・・・・」

「それは・・・？」

「オーパーツよ」

『「オーパーツ！？」』

『おい！バアさんどういう事だ！？』

「オーパーツには己の意志があるのよ、二人とも経験があるハズよ」

二人は納得した

「じゃあオーパーツの場所を示す地図を後でハンターに送るから準備ができたら此処へ戻ってきてちょうだい」

『「はい（おう）！」』

ミソラはただ指令室を去るスバルの背中を見ているだけだった

「もっと・・・強くなりたい」

『ミソラ・・・』

ハープは名前を呼んであげることしかできなかった

「なら、俺が稽古をつけてやろうか？」

後ろを向いたら居たのは暁だった

第17話　ちりぢりシドウ！？（前書き）

もうそろそろオリキャラ出そうと思うんで、
もし良ければ名前くださいm（__）m
今後ともこのふがいない作者をよろしくお願いします。

第17話　ちりぢりシドウ！？

「なら俺が稽古をつけてやろうか？」

後ろを向くとそこには暁が居た

「あっ暁さん！？体は大丈夫なんですか？」

「おう！電波変換しても全然平気だ！」

「・・・・・」

「アシッド、本当？」

「ちょ！？多少は俺のこと信用しろよ！！」

「・・・で、本当？」

「（まさかのスルースキル・・・・）」

『ハイ、シドウの言った事はホントウです』

『一回ちりぢりシドウになった事により、長時間の電波変換にも耐えられるようになったのです』

「おいアシッド［ちりぢりシドウ］はいくらなんでもひどいだろ！」

『ヒトのことを［ちりぢり委員長］・・・と呼んでいたアナタが言えるセリフですか？』

正論を返され固まってしまった暁

「あのぁ・・・つまり特訓してくれるって意味ですか？」

「おう！でも今日は仕事があるから明日からな！」

「ハイ！」

そう言って指令室を出ていったミソラを見送っていた

～～～

第１８話　世界一災難な英雄

ＷＡＸＡ出たスバルとミソラは帰路についた。
そして家の前に着くと人だかりが出来ていたが気にせず家に入ろうとした・・・・が

「星河スバルさんですか？」

「え？あ、はい」

「スバル君、この人達誰？」

ミソラが聞いた

「さぁ、初めて見る人達だけ「あなたは本当にロックマンですか！！」　！？」

何故かスバルの正体がロックマンという事がバレていた

「そもそも何でミソラちゃんと一緒にいるんですか？」

「え、え～っと・・・・それは・・・」

――ドォォォン！！――

「な、なんだ！？」

報道陣の一人が叫んだ

『スバル！！早く行くぞ！！』

ウォーロックが叫んだ

「マスコミの人達が居るけどしかたないね・・・」

「行くよ！ロック！」

『おう！』

「トランスコード！シューティングスター・ロックマン！！」

そしてスバルはとうとうカメラに抑えられてしまった。

今まで何度か人前で電波変換していたため、マスコミからは「おおっ」という声が上がった

そこにいたのは大量のメットリオだった

「何でこんなに！？」

『ゴチャゴチャ考えても仕方ねぇ！行くぞスバル！』

そしてスバルはウィルスの群に飛び込んだ

第19話　ウィルスパニック！？

「バトルカード！プレデーション！！ワイドソード」

スバルは広範囲に効果を及ぼすカードをセレクトし、ウィルスを消去（デリート）していった

「ッ！なかなか数が減らない！」

スバルはど次々と出現するウィルスに悪戦苦闘していた

「「「「「助けにきたぜ（よ）！ロックマン！！」」」」」

「ハープ・ノート、オックス・ファイア、ジャック・コーヴァスにジェミニ・スパーク！！」

『どういう事だ！？コーヴァスとジェミニは俺達が消去（デリート）したはずだ！！』

「説明は後だ！ウォーロック、今はウィルスを倒すぜ！」

スバルはうなずき、ウォーロックは渋々了承した

「わかった、みんな！いこう！」

「「「「「おう（うん）！！」」」」」

そういうと五人は各々戦闘を開始した

「はあぁぁ！ロックバスター！」

「行っくよ～！ショックノート！」

「一気に行くぜ！ペイン・ヘル・フレイム！」

『「ジェミニ・サンダー！！」』

「ブロロロロ！オックス・フレイム！」

今の一斉攻撃でウィルス達はほぼ消去（デリート）された

『なかなかやるな！人間！』

「誰だ！お前は！」

ロックマンが叫んだ

『我の名はドーラ、炎を司る者だ』

第２０話　スペシャルストーリー～ｖｅｒ２～（前書き）

今回の話は物語本編に関わります

第２０話　スペシャルストーリー～ｖｅｒ２～

『『「「「「明けましておめでとう（御座います）！！！」」」」』
』

現在ＡＭ０：００、星河家では年越を祝っていた

「あ、そうだ！二人にお年玉を上げなくちゃ！」

「はい、スバルにはギターよ」

「・・・・・？」

てっきり最新の天体望遠鏡でも貰えると思っていたスバルはおもいっきり不思議そうな顔をしていた

「あら、嫌だったかしら、毎日ミソラちゃんと練習してるもんだからてっきり・・・・」

「あ、ゴメン母さん。考えごとしてた」

スバルはこれまで地球の危機云々を３回も繰り返している為普通の五年生より精神年齢が高いのだ

「はい、ミソラにはこれ。」

茜が渡したのは着物だった

「ＴＶでも是非着てちょうだい！」

「ありがとう！お母さん！」

『ミソラも着物を貰ったし、スバル君もギター貰ったからその服着てあわせたら？』

「あ！いいね、それ！」

ということで半ば強制的に曲をあわせることになった

そして数十分後・・・

「じゃあ・・・行くよ？」

「うん」

二人は曲を引いた。そして某女性組によってその様子が録画されミソラがマネージャーに紹介したのは言うまでもない・・・・

第２１話　守る力

『我の名はドーラ、炎を司る者だ』

「ドーラ！お前の目的は何だ！」

そう聞くとドーラは一瞬でロックマンの後ろにまわった

『ロックマン、貴公の抹殺・・・』

「！？」

「スバル君に触らないで！マシンガンストリング！」

『貴公が我の相手をするのか・・・よかろう』

『獄炎の（フレイム）剣（ソード）！』

そう叫ぶや否やドーラの炎が剣（つるぎ）となった

『行くぞ・・・』

ハープ・ノートは一瞬ドーラを見失ったかと思うと次の瞬間目の前で剣を構えていた

「嘘・・・！？」

この速度に誰も反応出来なかった、ただ一人を除いては。

ーーーザシュッ！ーーー

ドーラの剣が”流星”を捕らえた。ドーラは剣を引き抜くと炎に戻した。

スバルはミソラのほうを向くとにっこり笑ってまえのめりに倒れた

「ス・・・スバル君！！」

『目的は成し遂げた。だが貴様等も厄介だ・・・抹殺しよう』

「構えろ！来るぞ！」

反応したのはジャックだった。だがその時既にドーラは居なかった。

スバルとミソラの心が輝いた・・・［大切な人を守りたい］と

〜〜〜

第２２話　２００年前の力（前書き）

エグゼがでたりでなかったり・・・

第２２話　２００年前の力

「あれ、僕、死んじゃったのかな？」

そこは一面真っ白な世界だった。ただ、スバルはこの世界に見覚えがあったのだ

「此処って、僕の精神世界？」

『よく気がついたね！スバル君！』

「君は・・・・エグゼ！？」

スバルがいうエグゼとはロックマンエグゼの事である。以前２００年前に行った時のスバルの恩人である

『そうだよ！スバル君、でも、こんな所で油を売っていていいのかい？仲間が戦っているんだよ』

「でも・・・僕はドーラに・・・」

『君のミソラちゃんを思う気持ちはそんな物かい？』

「／／／何でそれを！？／／／」

『冗談だよ！・・・でも、君の仲間を思う気持ちはその程度じゃないだろ？』

「そうだ！僕は行かなきゃ！」

『まって、スバル君、僕の力を託すよ。もうすぐ過去から熱斗君達が過去か・・・て来る。それま・・んだ！スバル君！』

エグゼが言い終えるとスバルの視界が白く塗りつぶされた

～～～

第２３話　魂の共鳴（ソウル・ユニゾン）

ジャック達はドーラに３（実質４人）対１で苦戦を強いられていた。

『貴様等の実力はそんなものか・・・弱い、この手で消し去ってくれる！』

突如ロックマンからピンク色の光が放たれた

『馬鹿な！？ロックマンは始末したはず・・・』

「ソウル・ユニゾン！」

ソウル・ユニゾンと呼ばれたその姿はカラーが青からピンクに変わり、首にはマフラー、手には青いギターが握られていた。

「ロックマン！ハープ・ソウル！！」

「ロックマン？」

ミソラはまだ涙の残る目で訪ねた

「うん！正真証明星河スバルだよ！」

「さあ、行こう！ミソラちゃん！」

「うん！」

ミソラは涙を拭いて立ち上がった

『何をごちゃごちゃ「ショック・ノート！」

スバルはギターの練習の甲斐あって慣れた手付きでギターを鳴らした

「私だって！マシンガン・ストリング！！」

マシンガンストリングには麻痺効果があるためドーラは動けなくなってしまった

「いくよ！ミソラちゃん！ＥＦＢ（エグゼ・フォース・ビックバン）！！」

「「クラシック・ショック・ノート！！」」

二人は演奏を始め、大量の音符がドーラに飛んでいった。そして演奏が終わるとドーラは居なかった

第２４話　新生サテラポリス遊撃体（前書き）

最近前書き書いてないなぁ
あとしばらくしたらＡＭフォースＰＧＭとかクリムゾンＰＧＭだします！
では本編どうぞ！

第２４話　新生サテラポリス遊撃体

「うっ・・・・あれ？此処は？」

「あ！！スバル君！！！」

「あれ？どうしたの？ミソラちゃ・・・ごふっ！？」

突然ミソラがスバルにダイブした

「だって・・・スバル君一週間も寝たきりだったんだよ・・・私、スバル君が二度と起きないって思うと・・・グスっ！」

普通一週間も寝たきりなら心配するなというほうがおかしい

「そうだったんだ・・・ゴメンねミソラちゃん」

「・・・うん」

――ガラガラッ――

「入るぞスバ・・・出直すわ」

「まってまってまって！！暁さん！！」

「ん？せっかくイチャイチャしてるから俺は・・・」

「どうせＷＡＸＡのみんなにいいふらすんでしょ？」

「あ、バレてた？」

「うん、父さんとかにミソラちゃんと付き合ってるのバラさたの暁さんでしょ？」

「今からＷＡＸＡのメインコンピュータールームにいくぞ」

「え？あ、はい」

突然話をそらされたのでスバルはふぬけた声が出てしまった

〜〜〜

第２５話　時空を越えた来訪者（前書き）

機械の中から聞こえる声は『』とします

第２５話　時空を越えた来訪者

「なんで元遊撃隊メンバー以外の人が居るんですか？」

「それは順を追って説明するわね」

「まず、ジャックちゃん、クインティアちゃん、ツカサちゃんはせめてもの罪滅ぼしに、と参加してくれたわ」

「ルナちゃんは' クラスの委員長' として、だそうだわ」

この瞬間クラスメート達は「「「「軽！」」」」と思ったらしい

「本当はあと3人いるんだけど後で紹介するわね」

「それはさておきウィザードの話をするわね」

「コーヴァスちゃんとヴァルゴちゃんは私が、ジェミニちゃんはハンターの中で再構築されたわ。もっともジェミニちゃんの人格はヒカルちゃんだけれどもね」

「さて、あとの一人を紹介するわね」

というとおもむろにメインコンピューターのキーボードをたたき始めた。そうすると画面に男の人が写った、だが全員その顔に見覚えがあった

「「「「「スバル（僕）（君）！！？？」」」」」

「ええ、今から15年後の未来のスバルちゃんよ」

「「「「「「えええぇ！！？？」」」」」」

『そんないちいち驚かないでよ、過去に行けるんだから未来と『ス～バル！』ん？今通信・・ごふ！？』

画面の中で未来のスバルが何かに突撃され画面外に消えた

第２６話　未来の夫婦

『ねぇねぇスバル！今何してたの？』

画面外で誰かが言った

『１５年前と通信中だけど・・・』

『なら昔の私達が丁度付き合い始めたころだね♪』

『ヨイリー博士達待たしてるんだから、放してよ』

『あ、だったら私も写してよ』

『わかったから放して』

『え～わかった・・・・』

未来のスバル達は画面に戻ってきた。そして謎のもう一人は・・・・

「「「「「」ミソラちゃん（私）！？」」」」」

『あ、昔の私達だ。やっほー！昔の私！スバルとはうまくいってるかい？』

「そっちこそどうなってるの？」

『え？こっち？こっちはね、スバルと結婚したよ！』

『ちょ、ちょっとミソラ!?何いきなり暴露してるの?恥ずかしいじゃん!!』

「ねえねえ、そっちの僕達、そっちの会話のせいで僕達が付き合ってるのバレたんだけど・・・・」

「はぁ、もういいわ、あなた達お似合いだし、世界の英雄と国民的アイドルだしね」

「でもスバル君も国民的アイドルになるんだよ?」

「ミソラちゃん・・・それってどういう意味?」

「元旦の日にギター合わせたでしょ?それでナイショで録音してたんだけど、昨日マネージャーに推薦して・・」

ＰＬＬＬ!

第27話　過去と未来と今

「スバル君、早くでなよ♪」

この瞬間この場に居たほぼ全員が　スバル！ファイト！　とか考えてたりもしてる

「もしもし、星河です・・・」

『あ、星河スバル君？後でミソラと一緒に事務所まで来てくれないかな？じゃーねー　プツンッ』

『じゃあ本題に入るよ、みんな。まず、過去のＷＡＸＡに頼まれて僕達が力を貸すことになったんだけど僕等はそっちに行けないんだ。同じ時間に同一人物が二人いるのはまずいからね・・・あ、もう時間みたいだから詳しくは僕等の息子に聞いてね。それじゃ！』

そういうと前にルナや暁が出てきた装置が光って声がした

「ちょっと！熱斗！顔近い！」

「しかたないだろ！？どうしようもないんだから！」

「おい！光！足を近づけるな！」

「あのさ・・・あなた達誰？」

「「「そっちこそ誰！」」」

というと扉が開いて中から４人が出てきた

「き・・・君は・・・熱斗君！？」

「お、お前スバルか？久しぶりだな！」

「ところで熱斗君、何で２００年後にいるの？」

「「「・・・へ？」」」

第２８話　ヨイリーのネーミングセンス（前書き）

ぎりぎり今日の間に投稿できたぁ

第２８話　ヨイリーのネーミングセンス

「あなた達3人がこの時間に来たのは二つの原因があるわ」

熱斗達は現在ヨイリーからこの時代に来てしまった理由を聞いていた

「一つ目は私達が時間に干渉しすぎた事、もう一つがこちらの通信環境のほうが環境がよかったためにこちらの時間に引きずり込まれてしまったこと」

「それって・・・私達はもう元の時間に帰れないってことですか？」

「いいえ、元の時間には私達が責任をもって帰してあげるわ。ただ・・・」

「「「ただ？」」」

「こっちで問題が起きてるのよ・・・その問題が・・・」

「なら俺達が解決するぜ！な、ロックマン！」

『うん。熱斗君の言うとおりだよ！この世界の人達が苦しんでるのに放っておくなんてできないよ！ね、みんな！』

「当然だ。貴様等にいわれずともやってやるさ」

「ちょっとぉ～何二人で盛り上がってるの？私達もやるわよ！ねロール！」

『うん！そのわるいやつらに一泡吹かせてやりましょ！』

「3人とも・・・ありがとうね、熱斗ちゃん、炎山ちゃん、メイルちゃん」

「「熱斗（炎山）ちゃん！？」」

第２９話　スバルの進路？（前書き）

明日（つまり今日）更新できないかもです（一応深夜更新・・・）
（一人漫才ｗｗｗ）

第２９話　スバルの進路？

熱斗達が話を聞いていたころスバルサイドでは

「君の名前は？」

ミソラが聞いた

「星河（そら）宇宙です。今年で１２才です」

宇宙の見た目は赤いパーカーに流星ペンダント、ミソラと同じような髪型だが色がスバル、エメラルドグリーンの瞳、ビジライザーに赤色のギターといったまさしくミソラとスバルの”子”なのだ

「宇宙君かぁ～いい名前だね」

ツカサが言う

「そうだな。・・・ところで未来の俺達は何してんだ？」

ジャックが聞いた

「え～っと母さんと父さんがアイドルで、ゴン太さんが吉○家の店長で、キザマロさんが政治家、ルナさんはＣＡ○ＣＯＭの社長秘書でツカサさんとジャックさんはカフェやってます。人気ですよ？町の女性に。あと父さんが休みの日に毎朝通ってるから＋α」

「あのさ、宇宙君。アイドルミソラちゃんと僕って言った？」

「うん。そりゃあもうすごい人気で父さんか母さんの出てる番組は平均視聴率３０％越えは当たり前、ライブの時は五万人のチケットなら男性５０％女性５０％の割合だよ」

この言葉を聞いて全員（スバルと宇宙以外）が言った

「「「「「よかったね。進路が決まって」」」」」

そこにヨイリー博士達が戻った

第３０話　遊撃隊新メンバー

「みんなに連絡があるわ！」

ヨイリーが入ってきてそうそうにいった

「遊撃隊に新メンバーを追加するわ。三人とも、入ってきて。」

そうすると扉が開きその三人が入って来た

「光熱斗です！知ってる人も知らない人もよろしくな！」

「伊集院炎山だ。宜しくたのむ」

「桜井メイルです！宜しくお願いします。」

「彼らには過去に帰るまでの間遊撃隊として「すいません！！遅れました！！！」

声の出所を見るとそこには黒髪の男の子と白い長髪の女の子がいた

「あら、遅かったわね、時差ぼけかしら？」

「まったくその通りで・・・」

「まぁいいわ。二人とも、自己紹介してちょうだい。」

「神崎ソウタです！よろしく！」

「井上ルミですわ。皆さん宜しくお願いいたしますわね。」

『熱斗君！この近くにフォルテの気配がする！』

「え！？でもここは２００年後だ『よく気が付いたな、ロックマン』

というとソウタのハンターからフォルテが出てきた

「なんでフォルテがここに！？」

「それはまた今度、それより博士、まだいいたい事あるでしょ？続きどうぞ」

「おほん！まずスバルちゃん。あなたはしばらくトライブＰＧＭの使用を禁止するわ」

第３１話　ＰＧＭの欠陥

「え？博士今なんて・・・」

「今のトライブＰＧＭは欠陥だらけなのよ」

「トライブオン程度ならいいかもしれないけどくれぐれもトリプルトライブはしないこと。いい？」

「あと過去から来た三人はＰＥＴを預けてくれないかしら？ナビのアップデートと端末を現代の物に変えるわ」

「「「はい」」」

「それでは解散！」

～～～

「ギク！？」

「さぁいこっかスバル君♪」

「いやだあああああ！僕はアイドルになんかなりたくな～い！！」

ミソラはスバルを引きずって消えていった

「なぁ・・・炎山、スバル、何があったんだろうな？」

「・・・さぁ？」

「熱斗達～早くしないとおいてかれるよ！」

「げ！？やば！」

それから数時間後、スバルとミソラは帰りのにウェーブライナーに乗っていた

第３２話　敵の奇襲

「はぁ～合格しちゃった！どうしよう！？」

「いいじゃん♪私とテレビに出れるんだからさ」

「ミソラちゃんも知ってるでしょ？僕が目立つの嫌いな事」

「え？私とテレビ出るのいやなの？（涙目＋上目遣い）」

「え？あ、嫌じゃないけど・・・」

「じゃあいいよね♪」

そういうとスバルに抱きつこうとしたが・・・

『その女、貴公にとって大切なものとみた！』

その声がした瞬間ウェーブライナーの天井に穴があき、ミソラが消えていた

「くっ！ミソラちゃんはどこだ！？」

『こっちだ！』

『さぁお前もこい！ロックマン！』

「行くよ！ロック！」

『おう！』

「トランスコード！シューティングスター・ロックマン！」

『来たか、ロックマン』

そういった者の腕にミソラが抱えられていた

「ミソラちゃんを返せ！」

『まぁまて、拙者の名はコウ。ＤＮ風を司る者だ』

「ミソラちゃんを返せ！」

『いいだろう、ただし・・・私にかてたらな！』

『トルネードランス！』

「ッ！？バッ、バトルカード！プレデーション！バリア！」

しかしそんな物は無に等しかった

第３３話　オーパーツの覚悟

「くそっバリアが・・・うあああああ！！！」

『止めだ、ストーム・ブレイク・トルネード！！！！』

「僕は負けるはけには行かないんだ、トリプルトライブ！！」

「！？スバル君！」

光が消えるとトライブ・キングがいたが少し様子がおかしかった

目にはいつもの光がなく、ただ、こうつぶやいていた

「ワレワレノシュゾクヲフッコウサセルノダ」

そういうとなんの予備動作も無しにカイザー・デルタ・ブレイカーを放った

『な・・・ぐあああああ！』

「スバル君・・・・どうしちゃったの！？」

だがスバルはミソラの呼びかけには答えなかった

～～～

『キサマノカラダハイタダイタ、アトハセイシンヲウバウノミ』

「何を・・・ぐっあああああ！！！！」

「君たちは僕の体を使って何がしたいんだい？・・・・・・」

『シュゾクノフッコウ・・・・』

「もう・・・・君達の種族は滅んだんだ」

『ホロンデナドイナイ、コレカラフッコウサセルノダ』

「本当は君達も解ってるはずだよ、こんなことしたって種族は蘇らない」

「大事なのは復興させることじゃなくて、過去、に囚われず、今、に伝えるのが僕らの役目なんじゃないかな？」

『ナラバ・・・オマエガワレラニキョウリョクシテクレルノカ？』

「もちろんさ、それが君達の願いならね」

そしてオーパーツは口を開いた

『ナラバ、ワレラノオサニナッテクレヌカ？』

「どういうこと？」

『ツマリ・・・・オマエハニホンジンカラムージン二ナリ、ワレラノヒゲキヲイッショ二ツタエテホシイノダ』

スバルは驚いたが決心にそれほど時間はかからなかった

「わかった。そのかわり君達も僕に力を貸して欲しい」

『ヨカロウ、ワガアルジヨ・・・・・・』

そういうとスバルの精神世界は光に包まれた

第３４話　真の強さ

現実世界ではトライブ・キングと騒ぎを聞きつけて駆けつけたジャック、ゴン太、暁、ツカサを合わせた計５人が戦っていた

「おいスバル！自分の彼女に攻撃するたぁいい度胸じゃねぇか！」

ジャックがいう

「違うよジャック君、スバル君はおそらくオーパーツの力に飲み込まれているんだ、そして」

「そして力ずくで目をさまさせる・・・だろ？」

「ならちからずくだ！グレイブクロー！」

『「ジェミニ・サンダー！！」』

「フレイム・ブレス！」

「ウイング・ブレード！！」

「マシンガン・ストリング！」

だがトライブ・キングはすでに三角形を書き終えようとしていたが

突如トライブ・キングから光が放たれた

そしてそこにいたのは・・・

「トリプルフォーストライブ！」

「トライブ・カイザー！！」

名前をいいおえたとたんトライブ・カイザーは全員に近づき深々と頭を下げた

「みんなごめん！」

そういってみんなに事情を説明し、帰ったのは夜の7時だった

だが家の前に行くと

「スバルさん！あなたは本当にロックマンなんですか？」

「い！？」

「そもそも二人は付き合ってるんですか？」

「付き合ってませ「付き合ってます！」

第35話　家ってこんな、広かったっけ？

「ななななな、何でバラすの！？」

「だって隠しごとは良くないよ、スバル君」

「いやいやいや芸能ニュースになるから！」

「え～そんなこと言ったらスバル君とっくにニュースになってるじゃん、青きヒーローロックマン！ってさ」

「で、二人の関係は『メット』なんですか？」

「「「メット？」」」

「ウィルスだよ、スバル君。ロックマンの出番だよ♪」

「ああもうどうにでもなれ！」

スバルは自暴自棄になっていた

「トランスコード！シューティングスター・ロックマン！」

「ロックバスター！」

そういってウィルスを退治すると目にも止まらぬ速さでドアに向かってウォーロックアタックをした

「あ、まってよスバル君！」

そういってミソラもドアに駆け込んだ

「「ただいま〜」」

スバルは靴をしまおうとするとすぐに異変に気がついた

「（靴が多いな）」

いつもより6足も多かった

「あらお帰りスバル、みんな、ごはんよ！」

「みんな？」

そうすると二階からどたどたと足音がした

「スバル達、あたらしい家族よ」

「お、スバルお帰・・・んご！？」

「光邪魔だ。どけ」

そういうと炎山は熱斗を踏みつけて食卓についた

第３６話　スバル危機一髪！？

「てめぇ！炎山！何しやがる！？」

「熱斗さん、少しどいてくださるかしら？」

「す、すいません・・・」

熱斗はすっかりルミのペースに飲まれていた

「あのさ、みんな何してるの？」

スバルは聞いたが後悔した

「「「「「「何ってご飯食べてるんですが何か問題でも？」」」」」」

「もういいです」

そこには遅刻組、過去組、そして宇宙がいた

「それじゃ二人とも席着いて」

「「「「「「「「「いただきます！！！」」」」」」」」」

「テレビつけよっと」

スバルはテレビをつけたが時すでに遅し、後悔とは虚しいものである

『速報です。星河スバルさんがロックマンとの確信がとれました、
そのＶＴＲをどうぞ』

そういうと画面に一連の騒動が映し出された

「な・・・！？」

『なお、今回の騒動で国民的アイドルの響ミソラさんがスバルさん
と交際していることが判明しました』

「父さん！なんで僕がロックマンってバレてるの！？」

「それはだな、これを見ればわかる」

大吾はリモコンをとると録画リストから会見という題名を押した

『ロックマンの正体はあなたの息子さんなんですか？』

『ええ、正真証明俺の息子、星河スバルです』

第３７話　日常（前書き）

東雲研究所の提供でお送りしませんｗｗｗ

第37話　日常

「父さん！！！！」

そこから地獄のスバルタイムが始まりそして全員（スバルを除く）が悟った

（（（（（（（（（（（基本的に怒らない人を怒らしてはいけない・・・！！）））））））））

～～～

「いいだろう」

そういって五人はスバルのドアに耳をくっつけた

「いっしょに寝よ、スバル君♪」

「だが、断る」

「なんで？」

「僕男だからね？」

「じゃあキスして？」

「／／／！？／／／」

「じゃあいっしょに寝よ」

「無理！」

「じゃあキスし「おやすみ！」

それから数十分後

第３８話　スバルの変化

「ねぇハープ、スバル君寝たかな？」

小声でハープに聞いた

『寝てるわね』

「そっか、ありがと。お休みハープ」

ミソラは何の躊躇もなくスバルのベッドに入りスバルに抱きついた

そのころ外の五人は

「うわぁ、大胆だねぇ・・・」

「母さんって昔からあんな大胆だったんだ・・・」

「もう寝ようぜ」

「光に賛成だ」

外でそんな話がされてる中スバルは寝苦しそうにして起きた

「・・・やっぱり・・・見えるんだな」

「ロック、起きてる？」

『ああ、起きてるぜ』

「気づいてる？僕が『見えるんだろ？』
『ビジライザーなし電波世界が』
元ＦＭ星人であるウォーロックは僅かな周波数の変化にも気付けるのだ
『突然お前の周波数がソロ見てーになったからな』
「電波変換に支障はある？」
『ねぇ・・・それと早く寝ろ。明日学校だろ？』
「うん。お休みロック」
スバルは眠りについた、翌朝
「父さん起きないね」
「熱斗みたいね」
「この世界には光が二人いるのか？」
炎山はつぶやいた

第３９話　この展開は！？

「スバルさん起きませんわね」

「熱斗は起きたよ！」

「うぐっピンク色の悪魔が・・・」

「そうだ！アレやろ！」

「「「「「アレ？」」」」」

「昔でも”アレ”やるんだ・・・」

「見ればわかるよ♪」

ミソラはスバルの鼻をつまんでキスをした

「！？ん、・・・んんん！？んん・・・ん！？」

「朝から何するの！？ミソラちゃん！」

「起きないほうが悪いんだよ」

「朝からいいもんみしてもらったぜスバル！」

「ソ・・・ソラタ達、・・・」

スバルは顔を真っ赤にした

それからスバル達は出ていった

「「いってきまーす！」」

スバルはドアを開けた

「お二人は本当につきあ」

――ガチャン！――

「「トランスコード！」」

「シューティングスター・ロックマン！」

「ハープ・ノート」

「熱斗君達！」

「おじさん！」

「ナビのアップデートが終わったから返すよ」

第４０話　まずい！！！

「おぉ！？ロックマン！」

『ただいま。熱斗君』

「じゃあもうそろそろ時間だな。六人ともいってこい！！」

一方学校

【星河！！！一体どういう事だ！？】

「スバル君。楽しい楽しい拷問の時間よ」

「ひぃぃぃぃ！！！」

スバルは過去から宇宙が来た時に委員長に付き合っている事をバレないように死守したのだ

「みんな～席に着け」

「今日は転校生が六人も来るぞ！」

「みんな仲良くしろよ。あとパニクるなよ！」

【？】

転校生が入ってくると各々黒板に名前を書いた

「光熱斗ですよろしくな！」

「伊集院炎山だ」

「桜井メイルです！みんなよろしくね！」

「神崎ソラタだ！仲良くしてくれよ！」

「井上ルミですわ。みなさんどうぞよろしゅうございます」

「星河宇宙です。よろしくお願いします」

【２００年前の英雄達が何でここに！？】

【てゆうか星河って何？どことなくスバルとミソラちゃんに似てる！！】

「みんな静かに！まず光達と神崎達はＷＡＸＡの依頼で外国と過去から、宇宙は未来から、ちなみに宇宙は星河の息子だぞ」

【え！？マジ？じゃあお母さんは？】

「何いってんの？父さんの隣に「あ～～～～～！！」

第４１話　白金ルナ、オン・エア

スバルは慌てて大声を出した
それに対してルナはご機嫌だ。スバルが隠したため勘違いしているのだ

「なんだ星河、恥ずかしいのか？」

「はい・・・・」

「宇宙、言っていいぞ」

「ちょ、せっ先生！？」

「父さんの隣にいるじゃん。みんな何言ってるの？」

クラスの全員がスバルとミソラを睨んだ。何故ミソラが睨まれるのかというとスバル、ジャック、ツカサ達はいわゆるイケメンなのだ。なので女子達がこの三人をずっと狙っていたのだ、そして取られたとなると・・・

「スバル君、女の子からの視線が痛いんだけど」

「僕も男子の視線が痛いよ」

「まぁいいか、みんな！授業始めるぞ！」

そして給食中
スバル達はジャック、ツカサ（以後委員長組に混ぜます）、委員長

組、外国組、過去組、宇宙とミソラが一緒にご飯をたべていた

「うぇ・・・人参だ・・・」

「ちゃんと食えよ、スバル」

「好き嫌いはいけないよ、ね！ヒカル」

『そうだな、世界の英雄が聞いて呆れるぜ』

「そうだ！」

『いい方法でもあったの？ミソラ』

ミソラはスバルの人参を摘んだ。そして

「スバル君、あ～ん♪」

その瞬間クラスが凍てついた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1142ba/

流星のロックマン～光輝く絆～

2012年1月12日18時53分発行